

2017 年 9 月 16 日

前回お話しした *Villa Romana a Cazzanello* のあるタルキニア野町と世界遺産となっている墓地遺跡について。

タルキニア

ローマの北西 90 km ほどのところにある小都市で、中世起源の城壁にとりかこまれている。で前 8~7 世紀に最も繁栄した南エトルリアの都市国家で、街の東の丘にエトルリア文明の墓が集団である。その中には壁画をもつものもある。壁画は墓室の中に保存されているものと取り外してタルキニア国立博物館などで展示されているものがある。

茶色い屋根の固まっているところが旧市街(城壁の中)。

町の西の外れにある S.M.デイ・カステツロ教会 *S. M. di Castello* は 12~13 世紀の初めにかけて建てられたロマネスク様式の教会で、モザイクで飾られた美しい入口(12 世紀半ば)をもち、3 廊のバジリカ式の内部も厳かな雰囲気をたたえている。祭壇の天蓋も同時期のものだ。

一方、町の中心には市庁舎の建つマッテオッティ広場 *PiazzaMatteotti* があり、この後ろには中世の地区が広がっている。13 世紀の建物をはじめ、古い家や町並みの景観は非常に印象的である。

遠景では、いくつも中世起源の塔が建っているのが見える。

塔のある町 サンジミヤーノ

話が脇にそれるが、中世のタルキニアの町に残る塔が残ることで世界遺産になっている町を紹介する。

フィレンツェの近くにあるサンジミヤーノで、別称「美しい塔の町」。中世の街並を残す地区が 1990 年に世界遺産に登録された。二つの街道の合流地点である交通の要衝として、12-13 世紀頃もっとも繁栄し、富と権力の象徴として多くの塔が建設されました。最盛時には 72 の塔があったが、現存は 14。塔を含め中世の街の様相がよく遺存している。

サン・ジミニャーノはエトルリア起源の都市で、少なくとも前 3 世紀には存在が確認されるが、都市が発展するのは 6 世紀以降。13 世紀には特にサフランの栽培とその国内外への販売(フランス、オランダ、シリア、エジプトなど)により、最大の繁栄を誇ることになり、その結果新たな都市の貴族階級が興隆し、72 基もの塔が競って建てられました。しかしながら、1348 年のペストの流行による人口減少に打撃を受け、ついに 1351 年には自治権をフィレンツェに渡すことになった。

もっとも古い塔は 1200 年頃のロニョーザの塔で 51m で、一方最も高い塔はグロッサの塔で 54m で 1311 年の建設。

塔は概ね正方形プランで、窓以外の装飾のほとんどない規則的な切石積だが、中には浮

き出し飾りのある切石や持ち送りを上部に使用した例外もある。

エトルリア文明

伝承によれば初代ロムルス(その治世はローマ建設の前 753 年からとされる)から始まる古代ローマ王政期の ラテン人の王、つまりローマ人自身の王は初代ロムルスから 4 代目までであり、5 代目タルクイニウス・プルスクスからはエトルリア人が王位に就く。この 5 代目はその名の通り、エトルリア都市タルクィニアの出身である。

5 代から 7 代の 3 代のエトルリア王は、フォルム・ロマヌムの整備、貨幣の発行、地下排水路の構築など、ハード・ソフト両面にわたってローマに大きな貢献をする。後進ローマに対して、エトルリアこそがそれを導いた先進文明であり、その一大中心地がタルクィニアであった。

ローマのカピトリウム美術館にあるローマ建国の伝説を示すとされるオオカミもエトルリア文明の所産。ロムルス(Romulus)とレムス(Remus)の双子の兄弟がオオカミに育てられたという。乳を飲む双子は後世に附加されたもの。

タルクィニアの古代

エトルリア 12 都市同盟の中心的都市国家であり、前 8 世紀から前 5 世紀まで栄えた。最初に定住したのは鉄器時代初期のピラノーバ文化を担った人々で、前 8 世紀にエトルリア人が都市国家を形成した。

最盛期は前 6 世紀で、ローマに王朝を樹立し、カンパニア地方にまで勢力を広げた。前 4 世紀以降、ローマの圧力を受けるようになり、前 3 世紀に衰退した。タルクィニアは強固な城壁でかこまれた都市国家であり、とくにその周辺にある墓地の出土品は、エトルリア文化研究の上できわめて重要な位置を占めている。前 6 世紀後半からの墓の内部は壁画によって飾られ、ギリシア、とくにイオニア地方の美術を反映している。

タルクィニアの古代墓群 (Necropoli di Tarquinia)

200 基ほどの墓がモンテロツィ(località Montarozzi)など 750 ヘクタールほどに分布している。また多くの石棺も出土している。

それらは墓室を有し、そこに葬祭絵画が施されている。そのことはタルクィニアだけに見られることではない。しかし史料が大変に豊かなので、前 7 世紀から前 3 世紀までの文明の変遷を辿ることができるのはここだけである。

見学できる墓には番人がいて、解説板も建てられている。

そのうちの一つ、TOMBA DEL GIOCOLIERI = ジャグラの墓 の解説板。

200 基ほどの葬祭絵画を伴った墓室は、貴族階級のものである。そこに描かれる光景は、日常生活が多く、死後も現世と同じ生活が続くと信じられていたことを示す。

エトルリア貴族の住居を再現した中に、葬祭競技、宴会、踊り、狩り、などが生き生き

と描かれている。エトルリア美術は奔放、あるいは規範から離れる自由や素直さ、それゆえの活気に溢れている。エトルリア美術はギリシア美術の模倣に終始した地方的なものであるとの見解は正しくない。そこには明らかな濃厚な固有性があるのである。

The Juggler's Tomb 軽業師の墓 530-550B.C.

三角破風には赤いライオンと緑の豹。その下で軽業師たちがショーを繰り広げている。右側で長い杖を持って腰掛けてそれを眺めているのが、この墓の住人。女性の頭に寄せられた燭台めがけて男が円盤を投げようとしている。

豹の墓(Tomba dei Leopardi) 480 B.C.

タルクィニアの古代墳墓群は、年によって異なるが現地ではいくつかの墓を見学することができる。そのうちの1つが「豹の墓」である。

宴会、舞楽、供物を持った人物の行列などが描かれる。故人の死後の生活を表しているものであり、故人を紐帯とした遺族の現世界での社会的地位をも強調する。棟木部分には円盤文様、天井の勾配部分には市松文様が描かれる。

墳墓に入って奥にあたる壁の破風に、一対の豹が二頭、樹木を挟んで描かれる。その下には、葉冠をかぶって着飾った3組の人物が宴会用の寝台に横たわり、従者たちにかしずかれて、談笑する。豊饒や不死のシンボルとしての卵を持つ。なお、褐色の肌は男、白い肌は女を意味する。したがって、左の一组は男同士の組で、他の二組が男女の組であるが、ここに描かれる女は、ギリシアに於けるように遊女ではなく、妻であると解されている。

タルクィニア国立博物館

1436年から1439年にかけて造られたパラツォ・ヴィッテレスキが、現在は博物館として使われている。ルネッサンス時代の建物で、ゴシック的要素も混じる。長らく居住されていたが、最後の所有者が破産したために1892年に競売にかけられたのでコムーネが買い国に譲渡し、現在は国立エトルリア博物館となった。

1階には石棺、前3世紀から前1世紀の葬祭彫刻、2階にはグラノーヴァ文化の遺品、様々な器形のギリシア陶器やエトルリア陶器、3階には「有翼の馬」などがある。

このテラコッタの有翼の馬が出土したのは、先程地図で示した、タルクィニア・ヴェッキアで墓地からは少し離れた居住地域にある神殿である。今は切石を積んだ神殿の土台部分が残っている。

保存上の理由から、モンテロッツィのネクロポリスの4つのエトルリア墳墓から剥ぎ取ってきた壁画が展示されている。

Tomb of Chariots 500-490B.C.

戦車の墓は1827年、完全な状態で発見された。

装飾は、壁の周りを走る 2 つのバンド上に配置される。下のレベルは宴会とダンスの舞台を示しているが、上のレベルでは、木の座席に座っている観客の前で葬儀が行われていることが示されている。

Tomb of the Ship mid 5-th B.C

船の墓は、紀元前 5 世紀半ばのもので、飾りは古風なスタイルです。この時期の墓によく見られる宴会場は正面の壁に描かれ、4 つのクリナイ(=ベッド)にもたれている客たち、給仕、フルートや豎琴の奏者。墓の名前は、左の壁の冒頭に描かれた船員と遭遇する船から来ている。

Tomb of Olympic Games 520B.C.

最も古い時期の絵画はオリンピック・ゲームの墓 (520 B.C.) のもの。保存状態の悪い左壁のシーンは、ボクサーが戦っていることと激しい戦車競争を、右側にはランナー、ジャンパー、円盤投げ、などのゲームがある。

The Triclinium Tomb 480-470 B.C.

Triclinium は台の 3 方に寝椅子を設けた食卓のこと。タルクィニアで最も有名なものの 1 つ。

正面の壁はクリナイに横たわる 3 人の恋人との宴会場を示し、若い男と女の子がフルートと歌の音楽に踊っている。茂みは、鳥たちや、その場を活気づける他の小さな動物と一緒に、人々の間に散らばっている。細部の描写は、ぎっしりと描かれています。

棺台の墓 470- 460B.C.

「棺台の墓」は 1873 年に発見された。墓は地下の岩盤に彫り込んだ矩形の墓室 (長さ 4.55m, 幅 3.42m, 高さ 2.60m) からなる。天井と周壁の全面を覆っていた絵は、1953 年に修復中央研究所によって岩面から剥がされ、タルクィニア国立博物館に保存されている。死は現世の生活の続きと考えられ、絵の諸場面は、当時繁栄を謳歌していた貴族階級の生前の生活と死後の世界を表わしている。

1990 年にブリヂストン美術館で開かれた[エトルリア文明展]に日本にも紹介された。

タルクィニアの墓室墓

青柳正規「イタリア古代壁画の修復と保存」H20.12.11 より

紀元前 5 世紀中ごろまでギリシア絵画の影響が濃厚だった。したがって、ほとんど現存しないギリシア絵画の資料としても貴重であるが、エトルリア美術の資料としての方がより重要。

タルクィニアの墓室墓の保存修復

19世紀から劣化が指摘され、保存修復の必要性が問われるてきた。ストラッポ（フレスコ画をはがして別の下地に膠で貼り付ける）の可能性も追求されたが、湿度があるため膠は使用できなかった。

20世紀に入り、加筆・補筆による修復作業が施されるが、1939年、Istituto Centrale di Restauro(中央修復研究所)が設立されて上記加筆・補筆部分の撤去がされた。

第二次世界大戦後、中央修復研究所での科学的修復法の進捗で湿気にも対処できる化学的糊（白色ゴム、アクリル製糊・・・）が資料可能となり、1950年代、棺台の墓などの壁画がストラッポされ、博物館内に墓室として再現された。

しかし乾燥した採色層の発色性が問題となってストラッポ法は中止となる。

タルクィニアの墓室墓 現在の課題

最大の課題は見学者・修復家の入室による温度・湿度の変化。

それに加えて菌類、藻類、バクテリアの繁殖、昆虫等の小動物の排泄物の付着・堆積、植物の毛根の侵入、異常気象による泥流の混入、自動車の振動などの要因がある。

現在の修復保存は、温度と湿度を可能な限り安定化すること、見学者数の制限、墓室を外気および見学者と遮断すること、照明器具の温度管理、墓室内環境の記録、通気と温度管理、などの処置が執られている。

チェルヴェテリ(Cerveteri)

ローマの北西約50kmに位置する。南部エトルリアの沿岸大都市である。特に前7世紀から6世紀にかけては、地中海域でも有数の人口を誇ったであろう。エトルリア人古代墳墓群が有名である。2004年に「チェルヴェテリとタルクィニアのエトルリア古代都市群」として併せて世界遺産(文化遺産)に登録された。

紀元前7世紀には大型墳墓、前7世紀末から前6世紀前半にはやや小型化した墳墓が特徴的であるが、前6世紀後半以降は立方体型墳墓が圧倒的に多くなる。前5世紀に入ると大きな転換が訪れ貧弱化が進む。しかしローマの完全な支配下に入る前のヘレニズム時代初頭、前4世紀から前3世紀初頭には、再び、部屋型墓が現れる。

浮き彫り装飾墓 Tomba dei Rilievi

《浮き彫りの墓》は、ヘレニズム初期の代表例である。前4世紀から前3世紀初頭によく見られるように、切り妻天井、棟木、垂木などが彫り出され墓室内には家が再現されている。但しこの死後の家は特に豪華で、柱や壁には武具、壺など様々な道具が彩色浮彫によって表現されている。墓は何世代にもわたり数多くの縁者が埋葬されたが、皆が宴会用の寝台に横たわって談笑し飲み食い、死後の世界もさぞかしにぎやかであったことだろう。

夫婦の陶棺

ローマ、ヴィラ・ジュリア国立博物館蔵の、チェルヴェテリに特有のテラコッタ製の棺

である。一組の男女が宴会用の寝台の上に上半身を起こしつつ横臥している。アーモンド型の眼、女の髪、男の髭の表現が上品で見事だが、しかし何よりも手の仕草が豊かである。それにより愛や信頼という感情が表現され、時空間や文明を超える普遍的なものとして我々をうつ。アルカイック時代末期の前 520 年頃の作品である。

パリのルーブル美術館にもチェルヴェテリ出土の夫婦の陶棺が展示されている。

(説明文には藤本強・青柳正規編『イタリアの世界文化遺産を歩く』2013 年 同成社刊 より引用したところがある)